

中國における日本觀の端緒的形態

— 隋代以前の日本觀 —

石 原 道 博

目 次

一、序 言

二、漢魏時代の日本觀

三、六朝時代の日本觀

四、隋代の日本觀

一 序 言

日本と中國との交渉史を通観してみると（一）隋代以前（二）唐宋時代（三）元明時代（四）清代（五）中華民國時代の五つにわけることができよう。そしてこれを公的と私的交通の面からみると隋・唐・明・中華民國とは概して公的交通であり、五代・宋・元・清とは主として私的の交渉であつた。いまこの間における中國人日本觀の変遷をかんがえてみると（一）隋代以前の日本觀はいわばその端緒的形態であつて、中國人の使者の見聞ないし存候存問といつたようなものが日本觀の根柢をなしていた。（二）唐より五代をへて宋になると、平和的な日華交通のさかんになるとともにその日本觀も一だんと飛躍し、傳統的な藩屬國ないし附庸國としての東夷觀より脱却することはできなかつたが、すこぶる同情友好的となりいわば善隣的日本觀の展開した時代であつた。（三）それが元代になると入元使者・僧らの質的低下のうゑに、一方では元寇あり、つぎの明代になると倭寇の害はいよいよはげしく加うるに万曆朝鮮の役あり、その日本觀は一轉して日本を狡詐殘暴として寇賊・仇敵視さえる憎惡と恐怖をふくんだ畏惡戰斗的日本觀が展開されるようになった。明末に残明の遺臣たちが「臣」と称し「聯唇齒之誼」、日本を「上國」視した隣好的日本觀は、まづたく「韃虜」による明朝の滅亡という非常時によせられた日本觀の一旋回にすぎなかつた。中國人の日本研究がようやく本格的になつてく

るのは、明代倭寇の影響であつたことも注目されねばならない。（四）清代においては日清戦争をさかいとしてその前後の日本観に相違をみとめるが、さきに元寇・倭寇・朝鮮の役などが日本観の悪化に拍車をかけていたのになし、日清戦争はこれと反対に戦後は対日悪感情がほとんど拂拭され、留日学生は陸續として來朝し、日露戦争後はいわば恋愛的日本観ともいうべき傾向をしめし対日感情の好轉はその最高潮にたつた。ただしその背後にはヨーロッパ文明輸入の便宜的・間接的手段とかがえていたことも否むわけにはゆかない。（五）はじめ孫文らの中國革命をひそかに應援していた日本が、やがて袁世凱以下の反革命運動と氣脈をつうするようになると、中國人の対日感情はふたたび急激に悪化しはじめた。そうして帝國主義的なわが大陸政策に反撥する中國人の排侮的日本観がついにこんにちの事態をまねいたことは、われわれの記憶になまなましいところである。このような日本観の歴史的変遷推移をながめてくると、こんご自由と平等と博愛に立脚した民主的日本観が、日華兩國の相互理解のもとにつくられることがまず第一に要請されねばなるまい。「万国重訳而至」という中國人の儒教的な外交思想は、海外貿易の面では朝貢（入貢・奉貢）賞賜（賜與・回賜）というかたちで清代までつづいた。日本も東夷の一としてこの制約のうちに通交したことはいうまでもない。これは中國における日本観の背後にながれている一貫した思想である。日本ではこの華夷思想をいさぎよしとせず、すくなくとも隋朝以後は機会あるごとにこれを打破して対等の地位と日本観をもたせようと努力したが、結局それは日清戦争をまたねばならなかつた。

以上は拙論「中國における日本観の展開」において私の意図する叙述の構成であるが、日本史を中國史の背景において理解しようとした先学の研究もすくなくない。たとえば大陸側の史料をあつめた周鳳の「善隣國宝記」三卷、撰者不詳の「統善隣國宝外記」二册、「統善隣國宝外記」一册があり、近藤守重の「外蕃通書」二十七卷には中國關係のものはすくないが、松下見林の「異稱日本傳」三卷は上中二卷にもつとも豊富な史料をおさめている（先哲叢談編卷三には「異稱日本傳拾遺」がやはりかれの著としてみえている）、これにつづく類書としては林恕の「國史外考」二十三卷（未定稿、内閣文庫藏）、山本北山の「日本外志」三十卷（異稱日本外史ともいつた？未定稿、半部は散佚したらしい）、伊藤松貞の「鄰交徵書」六册、木下元香の「異稱日本傳補遺」無卷数（いま傳わらない）、撰者不詳で同名の「異稱日本傳補遺」などがある。原念齋（1760—1806）の先哲叢談によれば増島澧水に「異稱日本事実」百卷があり、また前記山本北山の「日本外志」（異稱日本外史？）の拾遺とみられる「異稱日本外史拾遺」百六十四卷があつた。つぎに「統異稱日本傳」という撰著が三つある。第一は小原良直のえらんだ三卷十五册で、べつに「再統異稱日本傳」の著者でもある。第二は山崎美成の撰とおぼしき二册であり、第三は尾崎雅嘉のえらんだ三百三十卷百六册の大著である。尾崎雅嘉のものは現に上野図書館に所藏されており、史料の集録がやや難駁ではあるがその努力はまことに多とすべきである。林韋のえらんだ「通航一覽」八卷は日本側の史料を主としているが、総合的史料としてこよなき手引をあたえてくれる。以上はすべて明治以前のものであるが、明治以後になつて日本と大陸との關係がようやく緊密になるにともない、從來の史料集や考註のような撰述から、ようやく批判的考証的な研究書の成果をみるようになった。そして各時代や諸事件にたいする精緻な論著も發表されてきたが、著書としては外務省記録局の「外交志稿」（明治十七年）、菅沼貞風の「大日本商業史」（明治二十五年）、浅井虎夫の「支那日本通商史」（明治三十九年）、池内宏博士の

「文祿慶長の役」(正編大正六年、別編昭和十一年)・「元寇の新研究」(昭和六年)、木宮泰彦氏の「日支交通史」(上巻大正十五年、下巻昭和二年)、辻善之助博士の「海外交通史話」(昭和五年)、中山久四郎博士の「支那史籍上の日本史」(昭和五年)、橋本増吉博士の「東洋史上より見たる日本上古史研究」(昭和七年)、秋山謙藏氏の「日支交渉史話」(昭和十年)・「日支交渉史研究」(昭和十四年)、藤田元春博士の「上代日支交通史の研究」(昭和十八年)・「日支交通の研究」(中近世篇)(昭和十三年)、小葉田淳博士の「中世南島通交貿易史の研究」(昭和十四年)・「中世日支通交貿易史の研究」(昭和十六年)、岩生成一博士の「南洋日本町の研究」(昭和十五年)、志田不動齋氏の「東洋史上の日本」(昭和十五年)、市古宙三氏の「近代日本の大陸発展」(昭和十六年)、石原道博の「明末清初日本を師の研究」(昭和二十年)、森克巳博士の「日宋貿易の研究」(昭和二十三年)などが発表された。このほか関係著書ですぐれたものは二十指にあまるし、個々の論文についてはゆうに百篇をこえ、小論をもふくめればほとんど枚舉にいとまないほどであるが、通説的にのべられたものとしては秋山謙藏氏の「支那人の観たる日本」(岩波東洋思潮、昭和九年)、岩井大慧氏の「支那史書に現はれたる日本」(岩波日本歴史、昭和十年)、市村瓊次郎博士の「支那の文献に見えたる日本及日本人」(東方文化一、昭和十二年)などをあげる事ができよう。

私は以上のような諸研究にもできるかぎり目をおしたうえ、研究の対象を主として中國人の日本観にかぎり、大陸側の根本史料にさかのぼつて日本観の変遷推移を歴史的にあとづけるよう努力した。

二 漢魏時代の日本観

中國に残存し日本にかんする史書のうち、もつとも古くして問題とするにたる文献といへば、いうまでもなく魏志卷三〇「東夷傳の倭人の條である。魏志は三國志のひとつであり、いまの華北から華中にかけて雄拠した曹魏の歴史で、西晋の陳壽(233—297)の撰するところであるが、これを論ずるまえに魏志以前の史書について一おう検討しておかなければならない。まず中國の正史のうちでは後漢の班固(32—92)のえらんだ前漢書卷二八下「地理志の燕地の條があげられよう。「樂浪海中有倭人、分爲百余國、以歲時來獻見云」(從來多く「夫れ樂浪の海中に……」とよまれているのは誤りであろう。「夫」の字は前文につくべきである、というのがそれである。倭とは日本をさすこというまでもないが、燕に所屬するかのときかきぶりと樂浪をひとつの標準として倭を説明しているところに、當時の大陸と日本との關係、漢代の日本観のめやすがうかがわれる。その時代はほぼ前漢のすえ、王莽の篡奪前後、すなわち西曆紀元前後と推定される。樂浪は南鮮の韓人や日本列島の倭人にたいするいわばシナ文明の放射体ともいふべき存在であつたから、百余國にわかれていた倭人がときどき貢物をたずさえて、樂浪郡治の漢の役人をおとすれたものとおもう。

つぎに山海經を問題にしよう。これは撰者不詳であるが、卷一二「海内北經の條に「蓋國。在鉅燕南倭北、倭屬燕」とみえている。この書は司馬遷の史記卷一二「大宛傳のうちにもみえるから、前漢の武帝(140—87 B.C.)のときにはすでに存在していたことだけはたしかであるが、こんにちわれ

われのみる山海経は一人の筆になるものでなく、後人の加筆のあることはほぼ定説といつてよく、ことに「倭属燕」というのと、まえの前漢書卷二八下地理志に燕地の條にいてあるのを対照してみると、すくなくとも武帝が朝鮮を平定してからのち、漢人の實際上の地理的知識による加筆とみとめざるをえない。したがつて山海経をもつて、日本（倭）のことが中國の史書にあらわれた最初のものであると断定はしがたい。また元來山海経は荒唐な記事にみちた地理書であつて、そのうちから歴史的事実をくみとるにはもとより嚴正な批判がいるわけである。ちなみに蓋國の蓋は北京音では Kai であるが、南方では Kau と發音されるから韓のことをさし、韓國は燕の南、倭の北にあり、倭は燕に属しているといういみであろう。戰國のすえ燕が強大でその勢力が半島の韓をとおして倭にまでおよんでいたという觀察を「倭属燕」としたものであろう。なお注意すべきは、王芸生氏が「六十年來中國與日本」第一卷（民國二十一年）において「南倭・北倭属燕」（序説・古代關係之追溯）としたのはもとより誤読であり、これとおなじ誤りにおちいつて南倭・北倭にそれぞれ解釈をくだしているのは、わが國にも松下見林・新井白石そのほか多くの学者のあることである。たとえば松下見林は「日本自遼東則南也、自吳越則北也。故曰南倭、曰北倭」（異稱日本傳卷上二）ともつともらしい解釈をくだしている。また新井白石も「蝦夷一曰毛人、古北倭（北倭出山海經）」（新井白石全集第三・蝦夷志序）とか、あるいは「按流求古南倭也。南倭・北倭並見山海経」（同上・南島志總序）とかいつて山海経の記事をよみあやまつていることがしられる。つぎに山海経の大荒東経をみると「有君子之國」とある。これは論語子罕第九に「子欲居九夷、或曰陋、如之何。子曰、君子居之、何陋之有」とあるのと關係あることばで、この「君子之國」「君子居之」ということが、のちに東方の日本と連想されるようになるのである。九夷とはもとより中華思想からでたもので多くの異民族、おそらくはいまの山東方面の島にいらかんがえられたのであろう。

さて倭という呼称が、もつとも古い日本にたいする中國側のよび名であることにはまちがいないが、その起源とその意味とはどうであらうか。ト部懷賢（兼方）は釈日本紀のうちで「取我（訓）之音、漢人所名之字也」といい、藤原兼良は日本書紀纂疏のうちで「旧説吾邦之人、初入漢、漢人問謂、汝國名如何。吾答曰、謂吾國耶。漢人即取吾字之和訓、命之曰倭」といい、松下見林はこれに解釈をほどこして「漢朝人言語不通、不曉我朝人謂吾國耶之意、不能再問、訛稱倭也」「日本仲哀天皇崩、神功皇后攝政而征三韓。漢晋人能知之。故曰以女爲主。蓋倭字從女从人。乃以女爲主之義、而以所訛聞之未爲音也」といつている。しかし漢人がはたして倭の字を當時「わ」と發音していたかどうかも詳らかでないし、むしろ「ゐ」と發音されて委に通じていたらしいから、見林の解釈もいささか牽強にすぎるとおもふ。また「我」「吾」の音をうつしたとみるより、私はやはり北九州方面の豪族の地方名（國名）をうつしたのではあるまいかとおもう。後漢書卷一一五東夷傳にみえる倭奴國の入貢に關係ありとおもわれるかの「漢委奴國王」の委奴は、当時の漢でどのように發音されていたか詳らかでないが、委（倭）奴國の位置については諸説があり、藤井貞幹は筑前怡土郡、星野恒博士は宗像郡怡土郷とし、三宅米吉博士は儼（那珂郡）に比定しておられる（三宅米吉「漢委奴國王印考」史學雜誌三ノ三七）。私は三宅

博士の説をとるが、委奴が怡土の音をうつしたのか、ワのナの國の説傳かはべつとしても、おそらくこれらの地方名をつたえたものであることは誤りあるまい。かの倭面土國（倭面上國・倭面土地國）の解釈については、九州説のイト（回土？怡土・筑前糸島郡）と大和説のヤマト（畿内）と訓する白鳥・内藤両博士のほか、橋本増吉博士の倭末盧國（松浦）とする説、また異説として志田氏の倭人の黠面文身の風俗よりする倭面（倭面説）があるが、白鳥博士は倭面土―倭回土―伊都―倭（委） Weitu―Itu>Witu―Wi の事情を再論されている（白鳥庫吉「倭女王卑彌呼考」東亞之光五ノ六・七、「卑彌呼問題の解決」オリエンタリカ1・2、内藤虎次郎「倭面土國」藝文二ノ六、志田不動齋「倭面の意義と邪馬台國在南方説の否定」史苑四ノ五）。けだし倭の字は順ういみであるが、「東夷天性柔順、異於三方西北外之外」（漢書卷二八下地理志燕地）とあるから、東夷が夷蛮戎狄のうちとくに柔順（儒教の徳化がよくおよんでいる）ということともむすびついて伊都（怡土）——倭（委）と呼称されたのであろうか。倭を和とつうじもちいるようになったのは、むろん大和との關係ができてからのことであらう。

おわりに後漢の王充の論衡につきつけくわえる。卷八儒増篇には「周時天下太平、越裳獻白雉、倭人貢鬯草」とあり、卷一三超奇篇には「暢草獻於倭」とあり、卷一九恢國篇には「成王之時、越裳獻雉、倭人貢暢」とある。鬯草は南方産の一種の香草で、祭酒の原料として珍重されたもの。鬯草（香）、鬯鬯ともいう。暢は鬯につうする。しかしこれらの記事は、いずれも後漢のときの見聞をもつて周代における聖王の徳化が四夷におよんだという理想に附会したものとかがえられるから、むろん周代の史実とみなすわけにはゆかぬ。ただ父のうえからいえば、越裳と倭人とをいれかえると文意がつうするようである。

以上、かんたんながら問題になりそうな前漢書・山海經・論衡の三書につきその史料價値をのべてきたが、便宜上後漢書のこともここでふれておこう。いうまでもなく三國の魏と後漢とは年代的にいつて後漢がさきであるが、魏志と後漢書との製作年代はその逆である。すなわち魏志は晋の陳壽（233—297）の撰するところ、後漢書はそれから百余年たつた南朝宋の范曄（398—445）の撰するところである。むろん後漢書には同書独特の史料もあるがその卷一一五東夷傳の倭の條のときは、その材料を魏志卷三〇倭人傳にあおぎながら、その記事の冒頭よりしておもわざる誤りをおかしている。すなわち後漢書には「倭在韓東南海中、依山島爲居、凡百余國。自武帝滅朝鮮、使馭通於漢者三十許國」としているが、これは魏志に「倭人在帶方東南大海中、依山島爲國邑、旧百余國。漢時有朝見者、今時使訊所通三十國」の記事をみだりに潤刪したものである。そこでここでは魏志にみえぬ後漢書独特とおぼしきつぎの記事をかかげるにとどめる。「光武中元二年（57）、倭奴國奉貢朝賀、使人自称大夫。倭國之極南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年（107）、倭國王帥升等、獻生口百六十人、願請見。光武帝が倭の奴國王にあたえた金印が、そのうち七百余年をへた江戸時代の天明四年（1784）に博多附近の志賀島から発見され、いま黒田「侯爵」家に珍藏されているわけであるが、後漢書卷四〇輿服志をみると、天子が玉印黃赤綬であつたのにたいし、太子と諸王が金印朱綬、三公が金印紫綬、九卿が銀印青綬、それ以下が銅印黑綬とか木印黃綬とか

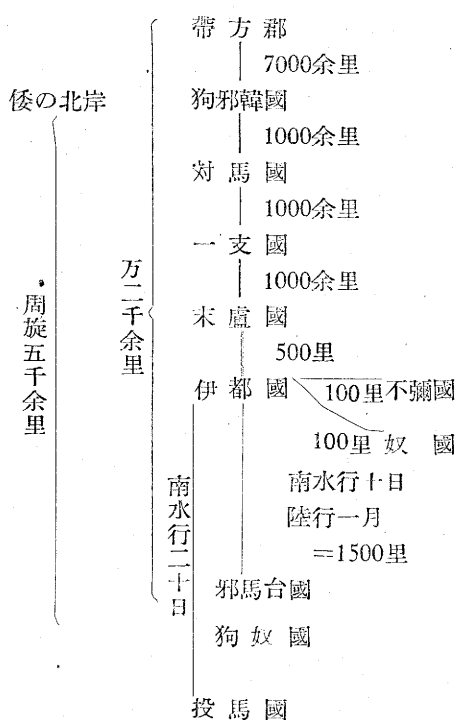
であつたことが知られる。してみると、倭の奴國王のもらつたのは金印朱綬か紫綬ということになり（私はのち卑彌呼が親魏倭王に封ぜられ金印紫綬をもらつてゐるから、このときも紫綬だつたとおもふ）、すくなくとも漢朝の三公以上に比せられたわけで、九卿（國務大臣）より一等上とみとめられたのである。眇たる博多附近の倭の酋長がすこぶる大國の王とみとめられた点はとくに注意をひくものがある。つぎに安帝のことは後漢書卷五安帝紀の同年十月の條にもみえてゐる。倭國王帥升については周鳳の善隣國宝記卷上や松下見林の異称日本傳卷上一にみえる景行天皇（大足彥忍代別）説や、倭面（土）國王帥升とする内藤湖南博士のヤマト説があるが、私はやはり倭の面土（回土ではないにしても）國とし、帥（師）升を九州の豪族の一人とかんがえてゐる（倭國王帥升―後漢書東夷傳、倭面上國王帥升―翰苑所引後漢書、倭面土地王帥升―唐類函辺塞部倭國條所引通典、倭面土國王帥升―宮内省圖書寮北宋版通典、倭面國―釈日本紀開題）。

さて、これまでの説明によつて魏志以前の三書および時代的にまぎらわしい後漢書のこととも明らかになつたから、つぎにいよいよ魏志卷三〇倭人傳についてのべることにする。この書がはやく日本にもつたわつたことは、続日本紀卷三〇称徳天皇の神護景雲三年（唐代宗大暦四年（769））冬十月甲辰の條に「大宰府言、此府人物殷繁、天下之一都會也。子弟之徒、學者稍衆。而府庫但蓄五絰、未有三史正本。涉獵之人、其道不廣。伏乞、列代諸史、各給一本、傳習管内、以興學業。詔賜史記・漢書・後漢書・三國志・晉書各一部」とあつて史記・漢書・後漢書・晉書とともに太宰府にたまわつたことによつて知られるが、それはともかく、魏志の記事はほとんどそのまゝにできた魏略によつてゐることは明らかである。魏略は三國魏の魚豢が、魏の武帝（曹操）・文帝（曹丕）・明帝（曹叡）三代のことを中心にかきしめたものであるが、日本と關係のある四夷列傳のごときはつぎの齊王（曹芳）（240―253）時代にまでおよんでゐる。したがつて魏志倭人傳の内容は、西暦三世紀ころ魏時代における一中國人の日本にかんする最初の見聞録ともみなされ、文中にしばしばみえる「今」とは魏時代のことであり、けつして晋の陳壽が魏志を撰んだときのことではない。日本における最古の文獻日本書紀よりも約四百年もふるいものであり、倭人傳の史料價値のたかいわけである。したがつて古來學者研究の好題目となり甲論乙駁、はなやかな論戰がこんにちまで展開されてゐる。論点のおもなものは同書の歴史地理的方面で、ことに耶馬台國にかんする大和説と九州説が対立してゐる。ここでは問題の対象がちがうから深くたちらないが、倭人傳全体にかんするこんごの研究にはなお重要なものがあるであらう。さて、魏時代の一中國人によつてゐるされた日本にかんする一見聞録は、おそらく朝鮮の帶方郡治の記録や通倭官吏の手記なども参考され、そののち晋時代の一中國官僚の手によつて編纂された。それは「東夷」として夫餘・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・馬韓・辰韓・弁韓・倭人というふうにならべしるされ、「東胡」としての烏丸・鮮卑などとひとしく東方のえびすとしてとり扱われ、なんらの差別観もみとめられない。しかもこのことは後世でもおなじであるが、あたかも当時中國の勢力がこの地方にまで波及していたかのごとく記されている。倭人傳を通観すると、まず文意が一貫してゐない点にきづき、奴國のごときは二度もでてくるが、大体その記述は三段になつてゐる。（一）帶方郡より耶馬台國にいたる行程とその余の諸國

(二) 帶方郡よりの行程と諸國との關係を比定し表示してみるとつぎのごとくなる。

帶方郡(京城)水行七百余里
狗狝韓國(伽倻·加羅·金海)水行千余里
討馬國戶(支大國)三千(老)岐水行千余里
末盧國(梅豆羅·末羅·筑前松浦郡)四千(名護屋·唐津附近)五百里
東南陸行伊都國戶千余里
(伊斗·伊蘇·伊魏·怡)東南奴國(儼·那邪·那珂郡博多)東行不彌國(字彌?)水行二十日
投馬國(薩摩三池·日向郡萬播磨須磨備後鞆津但馬出雲)水行十日
邪(土·糸島郡深江附近)百里
馬台國(九州說隅·薩摩·肥後)大和說日本海航行)
余戶(日向·筑後)大和說日本海航行)
余戶(九州說隅·薩摩·肥後)

最後の不彌國以下の三國が九州、大和両説のわかれる点であるが、いまはその異同を問題とせず、ただ私としてはやはり九州説をとり、邪馬台は筑後山門であろうことだけをのべるにとどめておく。それにしても白鳥、内藤両博士の九州、大和説は東西学界の代表的見解ともなり、両説をめぐ



るここだけの論争はこんにちもなお定説をみない。諸説これより多いものはおそらくないのであろう（内藤虎次郎「卑彌呼考」藝文一ノ二三・四、白鳥庫吉「卑彌呼問題の解決」オリエンタリカ1・2）。ちなみに白鳥博士が前掲論文において卑彌呼・邪馬台國の問題に最後の斷案をくだされた四十年來の学究的態度は、私のひとしお敬服するところであるが、ときをおなじくして榎一雄氏が、九州説を支持しながらこれまでもつとも難解とされた、帯方郡より邪馬台國にいたる里数と日程について新解釈を發表された。まゑにしるした里程記事と比較に便するため、その結論を表示しておかう（榎一雄「邪馬台國の方位について」オリエンタリカ1）。

さて倭人傳にはまゑの対馬以下の八國のほか、さらにつぎの二十二國があげられている。

斯馬國(志摩)——已百支國(伊勢石城)——伊邪國(志摩志都伊雜宮・伊豫)——郡支國(伊勢度会郡・榛原神社)——彌奴國(美濃)——好古郡國(美濃各務郡・方縣郡・河內中臣氏祖・合魂命)——不呼國(美濃池田)

鬼國(濃山縣郡・大桑鄉・紀伊)——爲吾國(三河額田郡・位賀・尾張智多郡・番鄉・伊賀)——鬼奴國(伊勢桑名郡・桑名鄉)——邪馬國(伊勢員弁郡・野摩)——躬臣國(伊勢多氣郡・櫛田・越國)——巴利國(尾張・尾張丹羽郡・大桑鄉・美濃山縣郡・大桑鄉・紀伊)

福郡(伊)——姐奴國(近江高島郡・角野鄉・周防郡・濃郡・福努國造)——對蘇國(近江伊香郡・土佐)——蘇奴國(伊勢佐奈縣・遠江佐野郡)——呼邑國(伊勢多氣郡・麻績鄉)——華奴蘇奴國(遠江磐田郡・鹿苑神社・武藏金鑽神社)

——支惟國（吉備・紀伊）——鳥奴國（備後安那郡・近江小野・越後魚沼）——（？）奴國（筑前縣那津・河野・毛野・熊野）——狗、奴、國（熊襲・球磨・伊豫）

内藤・山田両博士や志田氏による右のような比定は、それ自体あながち無意味ではないが、大和・九州両説の立場などによつてかわつてくるであらうし、すくなくとも字音の類似を検索するような方法だけでは意味をなさない。重出の奴國は、その前後の國名から想像してやはり□[?]奴國とあつた、はじめの字を誤脱したものであるまいか。山田博士は奴國を信濃國伊奈郡に、狗奴國を毛野國にあてておられるが、白鳥博士の球磨阿蘇Kuma—Aso 熊襲 Kumaso—Kuma—Kuma 狗奴の說にしたがうべきであらう（山田孝雄「狗奴國考」考古學雜誌二二ノ八一—二二）。半島の「飛石」対馬については「無良田、食海物自活、乘船南北市糴」とあり、一支^大國（壹岐）については「差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糴」とあつて、島國としての經濟事情をつたえている。魏志卷三〇弁辰傳をみると「國出鉄、韓濊倭皆從取之、諸市買皆用鉄、如中國用錢、又以供給二郡^{（樂浪・帶方）}」とあるから、対馬・壹岐の人たちもまた南鮮および北九州におもむいて交易したであらうことは想像にかたくない。末唐國（松浦）については「好捕魚鰓、水無深淺、皆沈沒取之」とその生活をつたえている。そのほか官名としてしるされているものに卑狗（ひこ彦）、卑奴母離（夷守・火の守）、爾支（主縣主・稻置）、泄謨觚（島子・妹子）、柄渠觚（彦子）、兕馬觚（島子）、多模（玉・魂）、彌彌（みみ耳）、彌彌那利（耳成）、伊支馬（伊古麻・生駒・活目）、彌馬升（觀松彦香殖稻〔孝昭〕天皇の御名代）、彌馬獲支（御間城入彦瓊殖〔崇神〕天皇の御名代）、奴佳靺（中臣・中跡）、拘古^〇智卑狗（子致彦・菊池彦）などがある。

（二） つぎに風俗習慣にうつり、興味ある觀察を摘記してみよう。まず刺青については「男子無大小、皆黥面文身。……斷髮文身、以避蛟龍之害。今倭水人、好沈沒捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽。後稍以爲飾。諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差」としるされる。いれずみをして蛟龍の害をさけるといふタブー觀、倭人が魚とりのうまいことについては後漢書卷九〇鮮卑傳にも光和元和（180）の條にかけて「聞倭善網捕。於是東擊倭人國、得千余家、徒置秦水上、令捕魚以助糧食」とあるのも参考とならう。なお飾りとしての文身とも關係のある、身体に化粧したことについては「以朱丹塗其身体、如中國用粉也」とある。衣服については「其風俗不淫、男子皆露紵、以木綿招頭、其衣橫幅、但結束相連、略無縫。婦人被髮屈紵、作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之」とあり、男女とももつともかんたんな服裝をしている。婦人の格好はいまのサンドウィッチマンのようでもあつたらうか。物産については「種禾稻紵麻、蚕桑緝績、出細紵絳綿。其地無牛馬虎豹羊鵲。兵用矛楯木弓、木弓短下長上、竹箭或鉄鏃、或骨鏃。所有無與儋耳・朱崖同。倭地溫暖、冬夏食生菜」とかあるが、牛馬がいまいというのは誤傳ではあるまいか。また比較に儋耳・朱崖などいまの海南島をひきあいだしているのは、つぎに香木をあげているのとともに、南海の島々と混同している点があつたようである。「出眞珠・青玉。其山有丹、其木有栲・杼・豫樟・栲・櫟・投・櫟・鳥号・楓香。其竹篠・簞・桃支。有薑・橘・椒・藁荷、不知以爲滋味。有獼猴・黑雉」とみえる。倭國をはるか南方にのびた國のごとくかんがえた倭人傳の記者は、白鳥博士のいわれるごとく魏の倭國征討を阻止牽制するいみがあつたかもしれない。

が、また一つにはその黥面文身の習俗などから、前漢書卷二八下地理志の粵地にかんする記事にむすびつけた傾きがあるであろう。住については「皆徒跣、有屋室、父母兄弟、臥息異処」とあり、そのほか「食飲用蠶豆手食」とか「其会同坐起、父子男女無別。人性嗜酒」とか、葬祭については「其死有棺無槨、封土作冢。始死停喪十余日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒、已葬琴家詣水中澡浴、以如練沐」とある。また行來渡海について「持衰」というめずらしい習慣があつたことは「其行來渡海詣中國、恆使一人不梳頭、不去蟻獄、衣服垢汚、不食肉、不近婦人、如喪人、名之爲持衰。若行者吉善、共顧其生口財物、若有疾病遭暴害、便欲殺之、謂其持衰不謹」とあるによつて知られる。卜法については「其俗琴事行來、有所云爲、輒灼骨而卜、以占吉凶、先告所卜。其辭如令龜法、視火坼占兆」とつたえられるが、これは鹿の肩胛骨をやいてうらなつた太卜、または肩焼卜などをさしたものであろうか。礼俗については「見大人所敬、但搏手以当跪拜。其人壽考、或百年、或八九十年。其俗國大人皆四五婦、下戸或二三婦。婦人不淫、不妒忌、不盜竊、少諍訟。其犯法、輕者沒其妻子、重者滅其門戶及宗族、尊卑各有差序、足相臣服」(市村瓊次郎博士は「支那の文獻に見えたる日本及び日本人」(「東方文化」)において「及宗族尊卑、各有差序」と訓じておられる)といひ、また「下戸與大人相逢道路、逡巡入草。傳辭說事、或蹲或跪、兩手扞地、爲之恭敬。對應声曰噫、比如然諾」とある。大人・下戸・跪拜あるいは刑罰に「尊卑各有差序」とは、まえにのべた文身に左右大小さまざまあつて「尊卑有差」というのとおなじく、すでに階級の發生していたことをしめすものであろう。そのほか「收租賦、有邸閣、國固有市、交易有無、使大倭監之」めだが、ことに「自女王國以北、特置一大率、檢察諸國」せしめた。女王國の王はいうまでもなく卑彌呼であるが、「事鬼道」「無夫婿」「以婢千人自侍」「居処・宮室・樓觀・城柵嚴設、常有人、持兵守衛」せしめていたという。——卑彌呼の記事はすこぶるシャーマニズムの巫女的性格を連想させるが、おそらく当時の日本がまだ母系母權制・母神崇拜からまつたく抜けきつておらなかつたためであろう。ヒミコ(ヒメコ)というのはやはりヒメミコト(姫尊・命)の略であつて姫兒(姫子)をうつしたものではあるまい。男性のヒコミコト(彦尊・命)——卑弓彌呼は彦御子であつて卑彌弓呼はあやまりであらう)にたいする女性の敬称とおもわれるが(新井白石は「古史通或問」卷上において日御子と天皇とする)、卑彌呼については大和・九州兩説においていろいろ比定されている。私は九州説であるから、やはり九州にいた最大の女酋長であつたとおもう。ちなみに、卑彌呼を神功皇后に比定したのはまず「日本書紀」で神功紀三十九・四十・四十三・六十六年の條には魏志と晋起居注をひいている。これをおそうたものに周鳳の「善隣國宝記」、松下見林の「異称日本傳」、村瀬之熙の「藝苑日涉」があり、むろん邪馬台を大和としている。これにたいし筑紫の熊襲の僞僭とし邪馬台を九州に比定した最初の学者が本居宣長で、「馭戎慨言」には卑彌呼を姫兒とし神代卷にみえる火之戸幡姫兒千々姫命・萬幡姫兒玉依姫命にあてている。熊襲女酋説をといいたのは鶴峯戊申の「襲國僞僭考」、近藤芳樹の「征韓起源」をはじめ、僞僭説を排した菅政友の「倭國考」(如蘭社話〇一七)・「漢籍倭人考」(史学雜誌三ノ二七——三六)、山田安榮の「靖方溯源」があり、星野恒博士は「日本國号考」(史学雜誌三ノ三〇・三一)において神功紀にみえる土蜘蛛田油津媛の先代にあてられた。那珂通世博士の「外交叢史」、吉田

東伍博士の「日韓古史断」、久米邦武博士の「日本古代史」などはいずれも上記の説をのべたものであるが、白鳥博士の「倭女王卑彌呼考」（東亞之光五ノ六・七）が公けにされるにおよんで邪馬台九州説が軌道にのつたかんじがしてきた。橋本増吉博士は「東洋史上より見たる日本上古史研究」においてこの総合的研究に努力されたが、一方、大和説をとえられた内藤博士は「卑彌呼考」（藝文一ノ二・三・四）において倭姫命に比定し、山田孝雄博士も「狗奴國考」（考古学雑誌二ノ八―二二）においてこれに賛意をしめされた。また考古学のたちばから大和朝廷の勢力ある女性とされた富岡謙藏氏の「古鏡の研究」、また梅原末治博士の「佐味田及新山古墳研究」・「上代近畿の文化発達について」（思想二三）、高橋健自氏の「考古学上より見たる邪馬台國」等々——がある。卑彌呼問題をめぐる論著は、最近の藤間生大氏の「埋もれた金印」（岩波新書）にいたるまで管見だけでもじつに百数十種にのぼっている（書評・拙稿「埋もれた金印」図書一七号）。

（三）倭との交渉は、まず魏の明帝の景初三年（239、二年は誤り）六月における大夫難升米の入朝、同年十二月における親魏倭王卑彌呼への詔書ののせ、つぎに少帝（曹芳）の正始元年（250）・四年（253）・六年（255）におよぶ彼我の交渉をのべているが、女王國より魏におくつた貢物のうちに男女生口十人および班布・倭錦・絳青縑・綿衣・帛布・丹・木狛・短弓矢などがみられる。卑彌呼が死ぬと「大作冢、徑百余歩、徇葬者奴婢百余人」であつたが、そのうち宗女の壹興（臺興意の）が位をつぐと、また男女生口三十人および白珠・青大勾珠・異文雜錦などを魏におくつてゐる。これによれば三世紀の前半十年ほどのあいだに、倭の女王國から魏ないし帶方郡に使者をつかわしたのは四回、魏使が倭の女王國にきたのは二回、彼我の交渉がかなり親密であつたことがうかがえる。また生口はしばらくべつとして、これらの貢物はやがて魏の人たちがこれらを倭の特産としてみとめるにいたつたであらう。さらに兩國間を斡旋往來した使者たち、たとえば魏國側の帶方太守劉夏・弓遵・王順および建中校尉梯儁・塞曹掾史張政、倭國側の難升米・都市牛利および伊声耆・掖邪狗ら八人（二十人）、倭載斯島越ら、それに倭からおくつた男女生口數十人（四十人以上）たちをとおして、魏では倭情をいろいろ問いただしたことも想像にかたくない。ただし帶方郡使は伊都國まできただけでそのさきへは行かなかつたらしい。その証拠には伊都國について「郡使往來、常所駐」とか、帶方太守王順が塞曹掾史張政らを倭國につかわしたとき張政らはつねに「爲檄告諭之」しており、ここには一大率がおかれ実質的には女王國の政治外交の中心地をなしていたようである。「皆臨津搜露、傳送文書賜遺之物、詣女王、不得差錯」の文は白鳥博士のよみかたにしたがつたものだが、榎氏のように「傳送文書、賜遺之物、詣女王、不得差錯」とよんでも、郡使が伊都國以遠の地にいかなくつたということが想像されるからである。さてさきのべた後漢の永初元年（107）から魏の景初三年（239）にいたる一世紀余にわたる日本と大陸との交渉は詳でなかつたが、これよりのち数次にわたる兩國の交渉によりにわかに倭國の事情が大陸側に鮮明されたのである。もはや「分爲百余國」（前漢書卷二八下地理志）というような状態ではなくかなり統一した國ができていたとみられるが、それはやはり九州地方を中心としたもので近畿以西の地域をふくめたものではなかつたものではあるまいか。なお親魏倭王にたいして金印紫綬をあたえているのは、魏では

國王・公侯伯子男などにあたえている点からみて、倭王にたいする魏の認識をおもいみるべきであろう。「親魏倭王」などという大称号は当時容易にゆるさなかつたもので、西域の大國たる大月氏王波調が「親魏大月氏王」といわれたくらいで、九州の一隅によつた倭女王卑彌呼がこれとならんで東西の兩大國にすえられたということはとくに注目にあたひする。親魏倭王の金印はもとより現存しないが、その印影は藤井貞幹の好古日録にみえている。

以上、魏志倭人傳の記事は、未整理の材料をそのままならべたようなところも多く、首尾一貫していないが、もつともまとまつた日本にかんする最古の記録として日本側の記紀、および考古学そのほかの成果などと比較検討すべき貴重な史料である。この点中國正史の外國傳がおおむね史料の價値のひくいにくらべて、倭人傳が國史にとつても特異な存在となつてゐる所以である。おわりに魏人が倭をどういうふうに見てゐたかを概括的にのべてみよう。倭人傳のなかに「奴」「卑」「邪」「狗」などの文字が多くもちいてゐるのは、倭にたいする中國の夷狄觀を端的にしめてゐるものであるが、そのわりにはよい國のようにかかれてゐる。「金印紫綬」をあたえられ、また當時としては異例の「親魏倭王」に封ぜられたことはまゑにのべたが、そのほかたとえば「食飲用籩豆」のようなのは儒家の礼をしめしたもので、「東夷天性柔順、異於三方之外」（漢書卷二八下地理志）教化のおよぶところとか、東方に「有君子之國」（山海經大荒東經）・「君子居之」（論語子罕第九）とかの思想とむすびつてゐるであろう。「婦人不淫、不妬忌、不盜竊、少諍訟」というような婦人や、そのほか一般の美德をならべしつてゐるのもこのためであろう。「尊卑各有差序」というのも君子國の体面をそなへてゐるごとくみとめたのであろう。「其人壽考、或百年、或八九十年」とは事實でもあつたようであるが、またかの徐福の入海求仙、不老不死の神仙の國ともむすびつてゐたにちがひない。倭儒國や裸國や黑齒國が、倭國のつきたりとしてゐるのも、こういう國々が東方ないし東南方にあるという考えからである。冒頭の「倭人在帶方東南大海之中」の記事ともむすびつくわけであろう（桃裕行「隣邦史書に現れた日本」新日本史講座・古代前期）。

三 六朝時代の日本觀

年代からいうと三國のつぎは晋である。そこで正史の晋書卷七九四夷傳の倭人の條をみると、その記事はほとんど魏志卷三〇倭人傳をおそうてゐるが、ここに注目すべき二つのことがある。第一は、魏志において倭人が隸面父身してゐるところから越人と類似運想せられ「自古以來、其使詣中國、皆称大夫、夏后少康之子、封於会稽」とするしあやうく夏后少康の子孫とされかけてゐるのが、晋書にいたつてついに「自謂太伯之後」とみえてくる。しかしこれはむろん日本人の自称ではなく、中國の史官が後漢書、魏志などのよみあやまりと想像からおこつた臆説にすぎないが、とにかく晋にいたつて日本人もついに吳の太伯の子孫になつてゐる。これはまゑにのべた秦の徐福の入海求仙や熊野止住傳説などとともに、民族の同祖同

源論のよりどころとなつたものであり、ことに太伯（泰伯）説はわが江戸時代にふたたび幕府の御用史家林羅山によつて採用されたことは注目すべきであらう。第二は、魏志にないあたらしい内容として「不知正歳四節、但計秋收之時、以爲年紀」の記事である。ただしこのような事例は、まだ曆法をしらぬ古代にあつては東西をつうじて常のことであり、曆の字がしめすように農耕をもととした Koyomi-Kayomi（日読み）であつて、倭人の特例とはいえない。なお注意すべきは晋書の製作年代である。これは唐の房玄齡（578—648）の撰ぶところ、つぎにのべる宋書・南齊書などよりむろん後のものである。さて晋書卷七九倭人傳のすえに「泰始初（285）遣使重詔入貢」とあるが、同書卷三武帝紀、泰始二年（286）冬十一月己卯の條に「倭人來獻方物」とあり、日本書紀卷九神功皇后六十六年の條には晋起居注をひいて「武帝泰初^〇二年十月、倭女王遣使、重詔貢獻」とあるのに相当する。この女王は魏志卷三〇倭人傳にみえる卑彌呼の宗女壹興（臺興）のことであらう。まゑに魏へ最後の使者をつかわしてから二十年目である。このち約一世紀半、兩國交渉のことはみえぬが、晋書卷一〇安帝紀の義熙九年（413）の條をみると「是歲高句麗・倭國及西南夷銅頭大師、並獻方物」とあり、南史卷七九夷貊傳に「晋安帝時、有倭王讚、遣使朝貢」とあるから、このときの遣使は倭王讚（後述）のときであり、つぎにのべる宋書卷九七夷貊傳にみえる高祖（武帝）の永初二年（422）の詔「倭讚万里修貢、遠誠宜甄、可賜除授」の記事に連絡するものであらう。

西晋・東晋のつぎはいわゆる南北朝時代で、南朝にかんする正史にはまず梁の沈約（481—513）の撰んだ宋書卷九七夷貊傳の倭國の條があげられる。ここには日本親といつたような記事はすこしもみえないが、ただ記紀にみえない高祖武帝の永初二年（422）と太祖文帝の元嘉二年（425）に倭王讚（贊）、ついで倭王珍（彌）が、また元嘉二十年（443）と同二十八年（445）に倭王済が、世祖孝武帝の大明六年（462）に倭王興が、順帝の昇明二年（478）に倭王武が、それぞれ使者をつかわしていることがみえる。そしてこれにたいする同書の本紀には、文帝元嘉七年（430）の遣使、同十五年（437）の安東將軍、同二十八年（431）の安東大將軍、孝武帝大明四年（460）の遣使、同六年（462）の安東將軍、順帝昇明元年（477）と同二年（478）の遣使などにかんする記事がある（宋書卷五六・一〇〇）。さてこの宋書の「倭の五王」の記事

(A) □ 讚(贊) (七二六八、五)

珍(彌) 濟 興

(B) 應神 仁德 履中

反正 允恭 雄略 安康

をのちにのべる梁書・南史とも比較してみると、まず(A)の系図がかんがえられる。

これをわが第十五代應神天皇より第二十一代雄略天皇までの(B)の系図にあてはめてみよう。讚は問題があるからあとまわしとし、珍(彌)は反正天皇のいみな瑞、齒別(の瑞)、済は允恭天皇のいみな雄略、間稚子宿彌の津、興は安康天皇のいみな穴穗の穗、武は雄略天皇のいみな大泊瀬幼武の武を、それぞれうつしたものとおもわれる。さて讚(贊)については仁德天皇のいみな大鷦鷯(おおささぎ)のさ、もしくは履中天皇のいみな去來穗別(いざほわけ)のさの音をうつしたものと考え

られる。まゑは那珂通世博士、あとは松下見林の説であるが、仁德天皇のながい治世にくらべ、履中天皇は在位わずか六年であつたから、あるいは

この間に遣使のことがなかつたのかもしれない。前田直典氏の新説は「應神天皇朝といふ時代」（オリエンタリカー）において、彌を仁德天皇（大鷦鷯の大的いみの漢訳）、讃を應神天皇、磐田の磐のいみの漢訳）に比定する。すなわち以上三説を御歴代にあてはめてみると、「倭の五王」とはそれぞれ（1）一七一—一八一—一九一—二〇一—二二一（2）一六一—一八一—一九一—二〇一—二二一（3）一五一—一六一—一九一—二〇一—二二一となり、那珂博士は履中天皇を、前田氏は履中・反正兩天皇を脱していると解釈するのである。前田氏の説はなお若干の疑義をさしはさむ余地があるようでもあるが、私は傾聴にあたいする新説とおもう。ちなみに讃を履中天皇とするものは松下見林の「異称日本傳」をはじめ、志村植幹の「和刻本宋書」、新井白石の「古史通或問」、白鳥清氏の「古代日本の末氏相統制度に就いて」（白鳥博士還暦記念東洋史論叢）などであり、仁德天皇とするものは吉田東伍博士の「日韓古史断」、菅政友の「漢籍倭人考」、久米邦武博士の「日本古代史」、那珂通世博士の「外交釈史」、橋本増吉博士の「東洋史上より見たる日本上古史研究」、岩井大慧氏の「支那史書に現はれたる日本」、池内宏博士の「日本上古史の研究」、原勝郎博士の「日本書紀紀年考」（日本中世研究）、太田亮氏の「日本古代史新研究」、坂本太郎博士の「大化改新の研究」などであり、津田左右吉博士の「古事記及び日本書紀の研究」「日本上古史の研究」は履中もしくは仁德天皇とされる。珍（彌）を反正天皇とするものは前記の菅政友、久米・原兩博士をのぞいたすべての人たちのみとめるところであるが、前田直典氏は讃を應神天皇、珍（彌）を仁德天皇と断じたのである。——なおここで注目されることは、倭王珍（彌）が除正をもとめた称号は「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓・六國諸軍事・安東大將軍・倭國王」であつたが、倭王済のときには百濟をのぞいてそのかわりに加羅をくわえている点である。加羅はいうまでもなく任那日本府のあつた金海加羅で弁韓十二國の一であり、辰（秦）韓・馬（慕）韓もすでに新羅と百濟にあわせられて実在しない國である。百濟もわが國ではこれを保護國視していたが、中國では百濟が獨立國として独自の朝貢をつづけている事実から、わが國の支配権をきとめぬ態度をとつたためであらう。まして新羅はわが國とは対立的な立場にあり、ようやく半島の強國として擡頭してくるのであるが、中國とせつする機会おそきままに南朝ではその実情をしらず、いわば百濟の附庸國ぐらゐに考えていたため、かえつてわが國の支配権をきとめたものであらう。したがつて「六國」といつても、じつは倭・任那の二國であり、のち加羅をくわえたにしても實質的には任那とかわりなく、形式的には三國でもやはり二國とちがひなかつたとおもう。しかし倭王武は右の「六國」に、ふたたび百濟をくわえて「七國諸軍事・安東大將軍・倭國王」と称しているが、このような虚位虚名をならべているのは外交的ゼスチュアにもよるであらうし、劉宋ではやはり百濟をのぞく六國諸軍事に除正している。なお「安東大將軍」のよびかたも注意を要する。倭王珍（彌）は安東大將軍と自称して宋より安東將軍をゆるされ、興もおなじだつたが、武にいたつて自称のまま安東大將軍をゆるされてゐる。ついで南齊からは鎮東大將軍、梁からは征東（大）將軍をうけているが、この称号について高句麗王は東晋のすえに征東將軍、百濟は鎮東將軍、劉宋のはじめにそれぞれ大將軍となつてゐることくらべて、南朝の倭國觀をみるべきであらう。と同時に、倭王がはやくも中國より一東夷をもつて輕視されることにたいする反撥をもきとめることができるとおも

う。それにしても倭王武が宋の順帝におくつた上表は、また注目すべきものであつた。そのなかに武の父祖（原文には「祖彌」とあるが、前田氏の新説では文獻通考の諸版本に「祖彌」とあるのをただしとし、武の父は渚（允恭天皇）、渚の父は彌、したがつて「祖彌」を仁徳天皇とする。吉田東伍博士は「日韓古史断」三七一頁において、祖彌を「祖弥」として應神天皇——称はホムダのホムのいみの漢訳——に比定されたが「東征毛人十五國、西服衆夷六十六國、渡平海北九十五國、云々」の記事がある。毛人と衆夷とはそれぞれ蝦夷（アイヌ）と熊襲のことであろうし、海北九十五國というのは南鮮方面をさしたものとおもわれるが、虚実あいふくめ高句麗を索制する意圖もあり虚勢をはつて誇示したものであろう。また中國の傳統的な東夷觀にたいする反撥もあつたであらう。しかしいすれにしても、当時における半島の百濟・高句麗と大陸の劉宋とをめぐる倭の國內・國際狀勢をあきらかにしている点は、記紀にみえぬ貴重な史料を提供しているのである。

つぎに梁の蕭子顯（489—537）のえらんだ南齊書卷五八東夷傳の倭國の條は、わずか六十四字の記述にすぎず注目すべきものはない。姚思廉（—637）のえらんだ梁書卷五四東夷傳の倭の條も、ほぼ魏志・宋書などの記事をおそうたものでとくに注意すべきものはなく、おわりに侏儒國・黑齒國・裸國および海人などつけたりの記事がみえるにすぎない。また唐の李延壽（生卒年不詳）のえらんだ南史卷七九夷貊傳下の倭國の條は、これまたおわりの文身・大漢二國の附録的な記事がめずらしいだけでほかにいづべき記載はない。しかしおなじ李延壽による北史卷九四四夷傳の倭の條は、じつはつぎの唐の魏徵（580—643）のえらんだ隋書より十年ほどのちにできたものであるから、北史と隋書との關係はあたかも後漢書と魏志との關係ににている。しかも隋代よりまえの記事においては隋書に「魏時訊通中國三十餘國、皆自称王」というのを北史では「皆称子」とあらためたり、邪驪堆（邪馬台）を邪摩堆にあらためたり、あるいは隋書にはないがまつたく史料的价值のない無用のふるい記事を挿入したりしているにすぎないから、ここでは問題にならない。ゆえに北史の隋にかんする記事は、次章の隋代のところで隋書と対比しつつのべることにする。——なお晋の李石の撰んだ統博物志卷五には「倭・辰・余國、或横書、或左書、或結繩、或鏤木。唯高麗摹写類法、取正中華」という記事があり、これはすこし参考になるが、梁の任昉の撰んだ述異記卷上の「日本國有金桃、其实重一斤」のごとき、またまえの梁書卷五四東夷傳の扶桑の條にみえる女國のときはスフレール（G. Schlegel）博士の説のように、千島にちかい蝦夷地をさしたものでその女人を海獸の一種とせずそれがわが八丈島をさしたものとかがえてみても、なお多分に説話的要素をふくんでおり、たしかな日本觀察ということには躊躇せざるをえない。

さて、わが仁徳朝より雄略朝にいたるまでの大陸交渉史はつまびらかでない部分が多く史疑をのこしているが、南朝側の史料によつてその欠をおぎなうものが少くない。そしてすくなくとも当時のわが國が、おりから國內統一の機運に乗じつつ半島に進出し、中國にたいしてもつよくその宗主権を主張したあとがうかがわれるのであり、彼我との往來交渉の結果はすこぶる南朝文化の影響をこうむつてゐる。いま南朝との交通路をかんがえてみると、建康（南京）より揚子江をくだり、江蘇の沿岸づたいに山東半島にいで、黃海をわたつて朝鮮半島の百濟におもむき、海岸にそつて加羅

金海附近より対馬・壹岐をへ、肥前の松浦に寄港したごとくである。それからさきは北九州の沿岸づたいに瀬戸内海をすぎ、東上して難波附近に上陸しようである。したがって南朝使者の内地見聞はほぼこの交通路を中心としたものであろうが、また倭國の使者もかの地においていろいろ倭情をといただされたこととおもう。むろん海東諸國をつうじて倭情をききとつていたことも従前とかわりなかつたであらう。かくて南朝との交通がさかになるにつれて、かれらの倭國にたいする認識も一だんとすすんだことも疑いをいれない。この間、半島においては新羅が強盛におもむいてついに任那日本府をほろぼし、中國では隋が南北朝をあわせて國內を統一し、かくて大陸の政局はここに一変するのである。

四 隋代の日本觀

私がここで問題にするのは、日本と中國との対等國交のはじめとされているかの小野妹子らの隋國訪問と、その答使裴世清の來朝とにより、日本の事情がいかに中國に理解せられ、それがいかに中國の史書にうつしのべられているか、という点である。隋代よりまえの記事がほぼ魏志・宋書の記事をそのままうけついでいるのにくらべ、さすがにここには注目すべき新事実がいろいろとのべられてくる。唐の魏徵(580—643)の撰んだ隋書卷八一東夷傳の倭國の條には、高祖文帝の開皇二十年(推古八年(800))に「倭王姓阿每、字多利思北孤、号阿鞞羅彌、遣使詣闕」とある。これは日本側に記事がないので本居宣長のいうように「西の辺なるものしわざ」(蝦夷慨言)ともかんがえられるが、遣使の事實はあつたであらう。隋書卷二高祖紀の開皇二十年春正月辛酉朔の條をみると「突厥・高麗^{高麗}・契丹、並遣使貢方物」とあるから、隋が國內を統一して海東の諸國を綏撫しようとするその機会をつかんで、日本もまた大陸の事情をうかがうために使者をつかわしたのではあるまいか。たまたまこの年は日本と新羅との關係が一そうわるいときであつた。境部臣が大將軍として新羅征討におもむいており、二年のちには來目皇子、ついでその兄当麻皇子がいずれも征新羅將軍としていろいろ画策されたが、あるいは中道にして薨じ、あるいは計画を中止されている。さて、右の阿每はアメ(天)、阿鞞羅彌はオホキミ(大君)ないしアメキミ(天君)であらうが、多利思比孤については異論がある。一つはタリスヒコ(足彥・帶彥)とは男性のよびかたであるのに、これを推古天皇とすれば女帝であり、しかもそのいみな豊御食炊屋姫の音をうつしたとおもわれぬから、おそらくつぎの舒明天皇のいみな息長足日廣額と混同したであらうという。もう一つはこのときの使者をやはり小野妹子とかんがえ、その出自は孝昭天皇の皇孫天智彥。國押人命であるから、かの國の質問にこたえたさいこれと混同したのであらうという。しかし私はさらに孝安天皇は日本足彥。國押人、景行天皇は大足彥。忍代別、成務天皇は稚足彥、仲哀天皇は足仲彥というごとく、足彥とはいわば天皇の異名のごとおもわれるから、阿每・多利思比孤は天足彥で一ばん天皇の称号であるともかんがえられる。なお阿鞞羅彌を松下見林のように豊御食炊屋姫天皇の訛傳とみるのは、すこし無理であらう。さて、隋の高祖文帝は所司をして倭國の使者にその風俗をたずねさせたところ、「倭王以天爲兄、以日爲弟。天未明時、出聽政跣趺坐、日出便停理務、云委我弟」

とこたえたことがみえる。高祖が「此大無義理」といつたのは当然であろうが、これは中國の「天子」の思想にたいし倭王は「天弟」「日兄」という虚勢をはつた反撥對抗意識のあらわれともおもわれ、さらにかの十七條憲法第八條の「群卿百僚、早朝晏退、云々」（日本書記卷二二・推古十二年四月賛戊）とあるのを多少反映しているようでもある。また「王妻号難彌、後宮六七百人。名太子爲利歌彌多弗利」とあるが、聖德太子はいうまでもなく厩戸豊聰耳皇子であるから、これが轉訛したとかんがえるのはすこし無理であろう。「内官有十二等。一曰大德、次小德、次大仁、次小仁、次大義、次小義、次大礼、次小礼、次大智、次小智、次大信、次小信。員無定数」とあるのは、いうまでもなく聖德太子のさだめた冠位十二階のことであるが、「德仁義礼智信」の順序は「德仁礼信義智」がただし。五常の順序は仁義礼智信であるところから、中國の史家にしてみればおそらく倭國傳をあむさいに仁礼信義智とあるのを訂正したつもりでいたろうが、じつは大德は末卑騰吉寐（真人公）とよまれたものであつて（翰苑）、以下の仁礼信義智のならべかたにもすこぶる注意のあらわれた結果であつた。「有軍尼一百二十人、猶中國牧宰。八十戸置一伊尼翼、如今里長也。十伊尼翼屬一軍尼」とあるのは、伊尼翼は稻置、軍尼は國造のごときをさしたものとあもう。服飾については、高貴のものは「其服飾、男子衣袴襦、其袖微小、屨如屨形、漆其上、繫之於脚」のであるが、「人庶多跣足、不得用金銀爲飾。故時衣橫幅、結束相連而無縫、頭亦無冠、但垂髮於兩耳上」のみであつた。しかるに隋にいたつて冠制がさだまり「以錦綵爲之、以金銀鏤花爲飾。婦人束髮於後、亦衣裙襦裳、皆有襪襪。竹爲梳、編草爲薦、雜皮爲表、緣以文皮」というような生活にすすんでいつた。日本書紀卷二二・推古十六年八月辛丑朔の條の隋使裴世清が國書を呈した記事のところに「是時、皇子・諸王・諸臣、悉以金髻華著頭、亦衣服皆用錦紫繡織、及五色綾羅」とあるのは参考すべきであろう。武器、武具のりいも「有弓・矢・刀・稍・弩・矟・斧。漆皮爲甲、骨爲矢鏑」つたが、「雖有兵無征戰」き太平の世であり、典礼はすこぶるおもんぜられ「其王朝会、必陳設儀仗、奏其國樂」したのである（志田氏が「其王の朝会には必ず儀仗を陳設す、其の國の樂戸十万ばかり、云々」〔志田不動齋「東洋史上の日本」四五頁〕とよんでおられるのは、いかがなものであろうか）。「其俗、殺人強盜及姦皆死。盜者計贓酬物、無財者沒身爲奴。自余輕重、或流或杖」。犯罪のつぐないとして奴隸にされたことはこの記事でもあきらかであるが、わが國でふるく奴婢のあつたことはかの邪馬台國の女王卑彌呼が死んだとき「徇葬者、奴婢百余人」（魏志卷三〇倭人傳）とあるによつてもしられる。そして「犯輕罪者、沒其妻孥」（晋書卷七九倭人傳）とか、「若犯法輕者、沒其妻子」（梁書卷五四倭傳・南史卷七九倭國傳）とかの記事とともに、官に沒して奴婢とする制度がおこなわれていたことを証するものであろう。さて、刑にかんする記事は前文につづけて「每訊究獄訟、不承引者、以木匠膝、或張強弓、以弦鋸其頂。或置小石於沸湯中、令所競者探之云、理曲者即手爛。或置蛇瓮中、令取之云、曲者即螫手矣」とあるが、これはまえの魏志にみえた刑法にくらべて、はるかに重刑であることがめにつく。ゲルマン民族の Gottesurteil (Wasserprobe ｾ Feuerprobe がある)を連想させる盟神探湯、それにいる呪教的審判の事実をつたえているのも興味があふかい。しかし「人頗恬靜、罕爭訟、少盜賊」なく、樂には五弦の琴、笛などのあつたことをつたえている。黥面文身と沒水捕魚のことはここにも

のべられている。また「無文字、唯刻木結繩。敬佛法、於百濟求得佛經、始有文字」とは佛教文化の影響をのべたものであり、「知卜筮、尤信巫覡」することはこれまでとかわりなかつた。年中行事としては「每至正月一日、必射戲飲酒」したが「其余節略與華同」じであつたし、また「好棊博・握栗・楊蒲之戲」んだのはけだし傳來のあそびとしてひろく歡迎されたためとおもわれる。風土および農業の進歩をつたえては「氣候温暖、草木冬青、土地膏腴、水多陸少」といい、鶉飼のことは「以小環挂鸕鷀項、令入水捕魚、日得百余頭」となかなかこまかい点までつたえている。「俗無盤俎、藉以櫛葉、食用手餽之」というような粗野な習慣がまだおこなわれていたが、「性質直有雅風。女多男少、婚嫁不取同姓、男女相悅者、即爲婚」とは眞偽あいなかばする傳聞であろう。そのころの日本は同姓不婚よりもむしろ同姓嫁娶のことがより多くみられたが、自由結婚をみとめている点も注意すべきであろう。「婦入夫家、必先跨犬[○]、乃與夫相見」とは聖火による呪術の様式とかんがえられ、こんにちでも國內各地にこれに類する習俗ののこっているものがある。ここにも「婦人不淫妬」とのべられている。葬祭については「死者斂以棺槨、親賓就屍歌舞、妻子兄弟、以白布製服。貴人三年殯於外、庶人卜日而瘞。及葬置屍船上、陸地牽之、或以小輦」とつたえられる。「其死有棺無槨」（魏志卷三〇倭人傳）というかんたんな葬りからしだいに丁重になつていくことがしられる。「有阿蘇山、其石無故火起接天者、俗以爲異、因行禱祭」とは日本の山にこんな初見である。けだし九州方面の見聞がようやく明かになつてきたためであろう。

おわりに「新羅・百濟、皆以倭爲大國、多珍物、並敬仰之、恒通使往來」としるし、以下日隋交渉のことをのべているが、新羅が日本を「敬仰」していたということは少くともこの時代にはなかつたであろう。ただ注目される点は、右の事実が一見半島諸國の日本にたいする態度の変化だけをのべているようであつて、じつはそのうらに中國人の日本觀がしだいに改められているさまが想像できることである。けだし「日出処天子、致書日沒天子、無恙、云々」の國書でなだかい聖德太子の自主的外交のたまものでもあろう。大業三年（推古十五年）倭國の使——小野妹子がふたたびおとすれたときは、隋は文帝の子煬帝が位につけていた。煬帝がこの國書をみてよろこばず「蠻夷書有無禮者、勿復以聞」といつたのは當然のことであろう。中華中國をもつて天下にのぞみ旭日昇天をもつて自負する豪快な煬帝が、対等以下の「日沒処天子」という呼びかたをされたのは、おそらく中國でもこれがはじめてであつたろう。それにしても「蠻夷書有無禮者」というところは、まさに中國天子・華夷思想の歴史性を端的にしめしている。ちなみに隋書卷三煬帝紀の大業四年（608）三月壬戌の條には「百濟・倭・赤土・迦邏舍國、並遣使貢方物」とあり、朝鮮側の三國史記卷二七百濟本紀の武王九年（608）春三月の條には「遣使入隋朝貢。隋文林郎裴清、奉使倭國、經我國南路」と、とくに倭國への奉使をつたえているとき、百濟が倭國を嚮導したのではあるまいか。煬帝の使者としてえらばれたのが裴世清（三國史記には裴清、隋書にも唐太宗のいみな李世民をさけて裴清としている）であるが、かれが來朝したみちすじとしては

百濟——竹島（絶影島）——新羅（濟州島）——都斯麻國（対馬）——一支國（壹岐）——竹斯國（筑紫）——秦王國。

のごとくかかれており、これはまえの魏志の行程記事と比較すべきであろう。松下見林は異称日本傳において秦王國を嚴島に比定しているが、たんなる想像にすぎない。むしろ山田安榮の靖方溯源卷上にいうごとく、周防の音を秦王にうつしたものはあるまいか。あるいは山陽道の西部にあつた秦氏の居住地と關係づけて秦王國といつたのかもしれない。また裴世清をむかえた小徳阿鞏台（北史卷九四倭國傳は何鞏台とす）というのは、日本書紀卷二二にみえる掌客のひとり大河内直糠手の音を一部あらわしたものであろうか。おなじく大祿哥多毗というのも、松下見林が小野妹子かとうたがつているのは誤りで、やはり饒騎七十五疋をしたがえ裴世清を海石榴市にむかえた額田部連比羅夫の（ぬ）かたべの音をうつしたものとあもう。このとき裴世清のもたらした隋の答書が日本書紀卷二二推古十六年八月壬子の條にみえてゐる。すなわち「皇帝問倭皇、使人長吏大祿蘇因高。等至其懷」にはじまり、「知皇介居海表、撫寧民庶、境內安樂、風俗融和。深氣至誠、遠修朝貢。丹欸之美。朕有嘉焉。云々」というのがそれであるが、「皇」はもと「王」とあつたのを改めたのにちがひなく、國書の文章のうえからみても附庸の朝貢國とみなしてゐることは明かである。ただ當時の日本がいかにもして「聞大國惟新之化」、中國と對等關係におしすまうと努力してゐる點は無視することはできない。そして裴世清の歸國にさいしては、三たび小野妹子をつかわさうとされた。日本書紀卷二二推古十六年九月辛巳の條にみえる「東天皇敬白西皇帝、云々」がこのときの國書である。「日出処天子」を中國の西皇帝にたいする「東天皇」とあらためた點も注意を要する。なおここにも大祿蘇因高と乎那利の名がみえるが、乎那利は吉子（士・師）雄成、蘇因高は小野妹子の音をうつしたものであろう。妹子が因高 Yin Kao であることには異論があるまいが、蘇 Su が野 Shu であるか、小（や Sa）ないし小野（さぬす Su）の訛傳であるかはにわかに断じがたう。野妹子とする岩井大慧氏の重箱式よみかたより、むしろ飯田武郷の日本書紀通釈卷三五の小（さ）妹子、もしくは伴信友のさぬ（す）いもこの音訳とみるのが妥當ではあるまいか。私は小（せう Sen/Sho）→Su）妹子の訛傳かと思つてゐる。ちなみに、小野妹子は近江國滋賀郡小野村の出身でその村名をもつて姓としたといわれるが、小野をそのころはたしてサヌとよんだか、オノとよんだかは後勘にまづ（岩井大慧「支那史書に現はれたる日本」岩波日本歴史）。

唐の李延壽の撰んだ北史卷九四四夷傳の倭の條は、まえにもふれたように隋書より十年ほどのちにできたものであり、しかもほとんど全く隋書の記事をおそうてゐるのみならず、隋使裴世清の記事を誤写し、つぎのごとく清より清にいたる百二十一字を脱落してゐるほどであり、とくに注目すべき記事はない（北史は世清とする。「」内を誤脱してゐる）。

……既至彼都。其王與（世）清。相見、大悅曰、我聞海西有大隋禮義之國、故遣朝貢。我夷人、僻在海隅、不聞禮義、是以稽留境內、不即相見。今故清道飾館、以待大使。冀聞大國惟新之化。清答曰、皇帝德並二儀、汎流四海。以王慕化故、遣行人來、此宣諭。既而引清就館、其後清遣人謂其王曰、朝命既達、請即戒塗。於是、設宴享以遺清、復令使者隨清。來貢方物。此後遂絕。

隋の倭國にかんする知見は魏志倭人傳より一だんの進歩をとげたごとくであるが、その認識の経路はなにによつたものであろうか。これは大別し

て三つの方面がかんがえられる。第一は隋人みずからの見聞、第二は倭人をおしての知悉、第三は外國人をおしての認識。第一のおもなものは隋使裴世清とその下客十二人らによる見聞である。第二は遣隋使、遣隋留学生・學問僧および隋使一行の掌客となつたような人たち——たとえば大使の小野妹子（蘇因高）、小使の吉士雄成（乎那利）、犬上君御田歙、矢田部造らをはじめ通事の鞍作福利、留學生の倭漢直福因、奈羅訳語惠明、高向漢人玄理、新漢人、大國、新漢人日文（晏）、南淵漢人請安（清安）、志賀漢人惠隱、新漢人廣齊（惠光）、さらに医〔師〕惠日・靈雲・勝鳥養・惠雲たち、それにしたしく隋使にせつした中臣宮地連鳥摩呂、大河内直繼手、船史王平、額田部連比羅夫、阿倍鳥臣、物部依網連抱、大伴嚙連の人びと、それに推古天皇・聖德太子をはじめ諸王諸臣にたいしても直接間接にいろいろ見聞をふかめたことであろう。ことに通事の鞍作福利は隋にとどまつてついに帰らなかつたから、隋では言語にもつうじていた福利をおしてかならずや徹底した倭情をといたのだしにちがいない。奈羅訳語惠明と新漢人大國もその歸朝のことがつまびらかでないから、私はこの兩人もまた隋にとどまつたのではないかとおもう。もしそうとすれば、かれらもまた福利とおなじように倭國の新事情をいろいろつたえたことであろう。第三の外國人をおしての知悉は、朝鮮人ことに百濟人などはそのもつとも有力なものだつたとおもう。中國が大陸の「橋梁」である朝鮮半島をつうじてその日本親をふかめていたことは、後世にいたるまでつづいていた事実である。またいわゆる隋の流求征討などによりこれら南島の「飛石」づたいにも、そこばくの日本にかんする傳聞が中國にもたらされたであろう。邪久國（掖玖・掖久・夜句・夜久・益久）すなわち屋久島のこと、倭國の使者によつて明かにされている記事が隋書卷八一流求傳にもみえてゐる（當時の流求は台灣とおもうが、秋山謙藏氏は琉球に比定される）。さうして煬帝が「蠻夷書有無礼者」といつてはなほだ悦ばなかつたにかかわらず、裴世清らを答使として日本につかわしたのはどういふわけか、を考えてみよう。隋書卷八一倭國傳にはべつにこれを直接説明するような記事がみあたらないが、同書卷八二南蠻傳の赤土の條をみると「煬帝即位、募能通絕域者。大業三年（607）屯田主事常駿・虞部主事王君政等請使赤土。帝大悅、賜駿等帛各百匹・時服一襲、而遣齎物五千段、以賜赤土」とあり、同書卷八一東夷傳の流求國の條をみると、同年に「煬帝令羽騎尉朱寬入海、求訪異俗」めたことがみえ、同書卷八三西域傳をみると「煬帝時、遣侍御史章師・司隸從事杜行滿、使於西蕃諸國」とあり、これらは歷代中國帝王の世界國家思想のあらわれとして外蕃を撫慰するという傳統的なやりかたであり、ことに虚榮心のつよかつた煬帝の心をうごかしたものとおもう。日本遣使のこともこうした對外政策、夷狄觀の一環として理解さるべきであり、経籍後傳記に「猶怪其意氣高遠、遣裴世清等十三人、送〔蘇〕因高來觀國風」（善隣國宝記卷上推古十五年條所引）と説明しているのは理由の核心をついたものとはいわれまい。

これを要するに、隋代以前の日本親は、倭人倭國はあくまで「東夷」「四夷」「夷蠻」「東南夷」「諸夷」「夷貊」の一つとして傳統的な華夷思想をもつてながめられてはいたが、隋代に倭人の特色として好意的にみとめていた点は「人頗恬靜、罕爭訟、少盜賊」「婦人不淫妬」とか、「性質直有雅風」「又東至秦王國、其人同於華夏」とかいつていることであり、前者は「婦人不淫、不妬忌、不盜竊、少諍訟」という魏志卷三〇倭人傳の

記事からうけつがれたものであつて梁書・晋書・南史にも多少ちがうが引用されているし、後者はやはり北史にほぼ同様につたえられている。概して隋代にいたる日本人にたいする觀察は「天性柔順」で「君子之國」の風あり、性質は素直で雅風あり、「華夏」にちかづくものとして好意的に観ていたといえよう。かくしてつぎの唐代にいたり日唐交通のさかんになるにつれて、中國人の端緒的日本観も一だんと前進し、善隣友好的日本観を展開するにいたるのである。旧唐書卷一九九には倭國傳と日本國傳とをべつべつにかかげており、隋書以前の倭（倭人・倭國）の呼称より日本の呼称へうつろうとする過渡期をしめしているのも、あらかじめ注目しておきたい。

〔附記〕本稿は文部省科学研究費による研究「中國における日本観の展開」の第一篇を、紙数の制限に應じて約半分に改稿したものである。もと各章のはじめに、別にそれぞれ一章をもうけて本論の背景をなす各時代における「大陸の狀勢」を述べてあつたが、本稿ではすべて割愛した。第二篇以下については逐次發表の予定。なお和田清博士と私の共編訳「魏志倭人傳・後漢書倭傳・宋書倭國傳・隋書倭國傳」（岩波文庫・近刊）とくにその解説・参考原文・参考文献、および拙稿「元代日本観の一考察」（和田博士還曆記念東洋史論叢・近刊）をあわせ参照せられたい。